TS（トータル・サティスファクション）を目指して⑭

「一人くらい・・・」の発想

校長室担当より

今日ご紹介するのは、元サッカー日本代表監督である岡田武史さんが早稲田大学で講演された時のお話です。

村の祭り酒という話を、選手によくします。収穫を祈念して夏祭りをする村があり、そのお祭りでは、酒が入った大きな樽を、みんなでパーンと割って始める風習がありました。ところがある年、貧乏でお酒が買えなくて「どうしよう、これじゃ祭り開けねえな。」とみんなで悩んでいると、ある人が、「みんなが家からちょっとずつお酒を持ってきて、樽に入れたらどうだ？」と提案したんです。「それはいいアイデアだ。」ということで、みんなが持ち寄って樽がいっぱいになりました。「これで夏祭りを迎えられる。良かった。」ということで当日にパーンとみんなで樽を割って「乾杯」と言って飲んだら、 水だったという話です。みんな、「俺１人ぐらい水を入れてもわからないだろう。」と思っていたんです。

ワールドカップ前の 2009 年、親善試合でのオランダ戦。試合中、「負けているけど、自分は自分の役割はこなしている、だから負けるのはしょうがない。」といった雰囲気の選手たちでした。 結果は惨敗。次のガーナ戦は、その気持ちを入れ替えさせました。「チームのために、自分がやらなくてはいけない。」 と意識付けをしたんです。 それが勝利につながったのだと思います。

組織で業務を行う場合に、「自分一人ぐらい、いいだろう。」という意識の人が出てしまうことがあります。実際には、「自分一人」ではないため、組織の動きは急速に鈍くなります。しかし、それ以上に危機的なのは、組織が動き始める時に「自分一人ぐらい」と思う人ばかりになってしまうことです。言い方を変えると「誰かがやるだろう」という気持ちです。現在、感染症対策については本当に気を配りながら行っています。これをそのような気持ちで行ったとしたら、本当に大変な事態を招くこととなります。

やらなければならないことを目の前にして、自分をごまかして、「自分１人ぐらいいいだろう」「誰かがやるだろう」という気持ちに一瞬でもなったとしたら、その思いは組織全体に蔓延していると可能性が高いと私は考えています。この場合には、やりがいや充実感は最初からなくな

るため、一人一人の心的負担から生まれる疲労感が逆に重くなっているということに自分たちは気づかないまま過ごすこととなります。

一人ができる一歩は小さいかもしれないけれど、その進もうとするひたむきな姿勢に引っ張られて、周りの百人が一歩目を踏み出すことができる。そんな組織は思わぬ個人の力を引き出し、一人一人に大きな自信と誇り、そして高い充実感を与えていき、組織はさらに成長していきます。「自分がやらなければ。」そんな思いを持った人物が一人でも多くいるかどうか。集団の人数が多ければ多いほど、「自分一人くらい・・・」という姿勢は出てきやすいものですが、本校のこの職員数の多さを逆にストロングポイントとするために、私たち一人ひとりがこの学校の一員としての責任を持ち、意識と協働性を高め、日々の行動をさらに充実させていきましょう。そして社会全体を充実感あふれるものへ変えていきましょう。繰り返しになりますが、私は皆さんを信頼し、既にその船に乗っています。この船には、児童・保護者を始め多くの方が一緒に乗っています。２０２１年は終わりますが、これからも引き続きトータルな視野で、いい学校を創りましょう、一緒に。（令和３年１２月２３日）

本校教職員として目指す方向性（確認）

※４月１日にお願いしたこと

１　トータル・サティスファクションの実現

２　学びに向かう力をもつモデルを率先垂範

３　対話とパートナーシップに基づく行動

４　全教職員で全校の児童生徒を見守るチームの実現

５　「今さえ、ここさえ、自分さえよければいい」の考えを戒める